

平成30年10月1日発行
(毎月1回1日発行)第481号

10

平成30年 / 10月号
No.481

日本教育

月刊

特集〇子どもと本



公益社団法人日本教育会
- Japan Education Corporation for the Public Interests -

人間力を磨く——石巻・耕人塾における人材育成

「耕人塾」塾長・石巻専修大学客員教授 木村 民男

はじめに

東日本大震災最大被災地である石巻地域の真の復興は人材育成であると決意し、平成二十四年に『耕人塾』を立ち上げた。趣旨は石巻地域の中・

高校生の「人間力」を磨き、地域や社会に貢献する人材を育成し、併せて大学生や市民を巻き込んだ学びの場とすることである。

発足当初は十数人での活動であったが、現在は塾生二十六名の他に運営委員、指導委員、協力員、サポーター等二〇〇名を超え、塾生の「あいさつ・清掃・ゴミ拾い」

活動が地元マスコミにも取り上げられ、市民の大きなうねりになりつつある。その一端を紹介したい。

基本方針及び活動内容

指導方針

①グループ討論や実践活動を通して「人間力」を向上させ、社会貢献への高い志を養う。

②「文・武・楽三道」の講話や体験を通して、人間的な幅と深さを身に付けさせる。

③日本の伝統文化を体験させ、自然や郷土を愛する心を育て、礼儀作法を身に付

けさせる。

テーマ

「世界に誇れる石巻地域にしよう」発信未来へ」

実践活動

「あいさつ・清掃・ゴミ拾い」活動内容

毎月一回（第三土曜日）一八・三〇～二〇・三〇を基本とし、年間十二回程度の活動とする。

第一期～第六期の活動を振り返って

草創期（第一期平成二十四年～第二期平成二十五年）

平成二十三年度は東松島市の教育長として震災対応に当

たり、翌年六月、石巻専修大学の特任教授として着任すると同時に『耕人塾』設立に着手し、十月に『耕人塾』をスタートさせた。草創期は思いだけが先行し、塾生の主体性や達成感の面で不足であった。

転換期（第三期平成二十六年～第四期平成二十七年）

これまでの研修内容を見直し、年間の研修・活動を十回程度に絞り、実践活動の「あいさつ・清掃・ゴミ拾い」を塾生の主体性を生かすために班ごとの活動とした。各班の多様な活動にはなったが、横の連絡が不足したために活動内容に統一感が足りなかった。

発展期（第五期平成二十八年～第六期平成二十九年）

サブテーマを「発信未来へ」とし、実践活動である「あいさつ・清掃・ゴミ拾い」活動を市民へ広めるため、地元の



第七期（平成三十年）の活動から

マスコミと連携を図った。他団体との交流会や連携した取り組みは大きな効果に繋がったので、次年度以降の大きな柱の一つにすることにした。

今年度は、これまでの活動をさらに発展させるために他団体と連携して活動すること大きな柱とした。また、塾生一人ひとりが「+1（プラ



スワン」の目標を立てて参加することや「楽しさ」と「主体性」をコンセプトに活動している。特に、石巻地域最大の祭りである「川開き祭り」に「動くゴミ箱」を背負い、明るいあいさつをしながらゴミ拾い活動を行う塾生の姿が地元マスコミにも大きく取り上げられ、実践活動である「あいさつ・清掃・ゴミ拾い」の輪が市民にも少しずつ広がっている。

『耕人塾』が目指しているもの

東日本大震災からの真の復興のためには人材の育成が急務であると決意し、『耕人塾』を立ち上げて七年目を迎える。『耕人塾』の目標は、設立当初から研修や実践活動を通じて「人間力」を養い、自らを耕し周りの人をも耕すことによって「世界に誇れる石巻地域」にすることである。

今年度は第七期を迎え、他団体との連携や市民への発信を重点的に取り組むことにより、石巻青年会議所や石巻環境保全リーダーの会等との連携による「川開き祭り」の当日のゴミ拾いは行政や実行委員会をも動かし、「ゴミゼロステーション」の設置など大きなうねりになりつつある。

今後は、志を同じくする団体との交流をさらに深め、行

政とも連携しながら「世界に誇れる石巻地域」にするためのうねりを市民運動にまで広げていきたいと思っている。

おわりに

塾生の中には中学生から高校三年生まで継続している参加者がいて、リーダー的役割を担っている。また、第一期生が監督をしている少年野球の部員四名がともに『耕人塾』に参加し、積極的な活動をしており、人材が育成されつつあることを実感している。

また、「あいさつ・清掃・ゴミ拾い」活動の輪が市民に広まり、賛同者が増えつつある。震災から七年七か月になるが、真の復興はこれからである。『耕人塾』が核となって「世界に誇れる石巻地域」にするための活動をさらに発展させたいと決意を新たにしている。